



TITLE:

第五倫傳考

AUTHOR(S):

狩野, 直禎

CITATION:

狩野, 直禎. 第五倫傳考. 東洋史研究 1979, 38(1): 86-108

ISSUE DATE:

1979-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153724>

RIGHT:

第五 倫 傳 考

狩 野 直 禎

- | | |
|---------|----------|
| はしがき | 五 第一回の上奏 |
| 一 郡吏時代 | 六 第二回の上奏 |
| 二 地方官時代 | 七 第三回の上奏 |
| 三 三公就任 | おわりに |
| 四 馬氏の進出 | |

は し が き

前漢後半より後漢にかけて、外戚の進出はしばしば中央の政治を混亂におとしいれ、王朝の存立そのものを危くさせるにまでいたった。現に前漢は外戚王莽のために國を篡われてしまった。後漢に入ると外戚の政治容喙に加えて、宦官の禍が生じ、いよいよ情勢は複雑さを増していく。

後漢二百年を通して、比較的安定期とされる明帝～章帝の間にあってさえも、外戚の勢力はしだいに著しいものとなつていった。本稿では、章帝即位とともに三公になり、外戚の權力を抑損するため、三回にわたり上奏文を呈出した第五倫を取上げた。

彼は王莽の時代に幼少期をすごし、兩漢交替期には營壘を作つて郷人を保護し、やがて地方の屬官から郡守となり、さらに三公にのぼつたのである。そうした彼の生涯を述べ、又三回の上奏文を出す背景となつた外戚進出の軌跡を追つて見

たい。

一 郡吏時代

第五倫の傳は後漢書卷七一（列傳三二）に見える。また袁宏「後漢紀」卷一〇、永平十八年の條からもうかがう事ができる。

第五氏は京兆長陵（陝西省咸陽）の人であるが、もとは戰國齊の一族であり、長安附近の園陵に徙充されてきた田氏の中では、第五番目に當る爲めに、第五と稱したのであるという。長陵は漢の高祖劉邦の陵名である。^⑤

倫は章帝の元和三年（紀元八六）に官を罷め、その後數年、八十歳餘りで卒したとあるから、およそ前漢哀帝の建平年（前六）後五の末に生れたのであろう。

彼は黃老を好み、孝行を以て稱せられた（後漢紀）が、兩漢交替期において、宗族間里の指導者として、二十歳前後の若さで活躍する。

「倫少介然、有義行、王莽末、盜賊起、宗族間里、爭往附之、倫乃依險固、築營壁、有賊、輒奮勵其衆、引彊持滿、以拒之、銅馬・赤眉之屬、前後數十輩、皆不能下、」

と後漢書に見え、後漢紀にはさらにつづけて、

「時米石萬錢、人相食、倫獨收養孤子外孫、分糧共食、死生相守、鄉里以此賢之、」

とある。倫は營壁を築いて宗族間里を防禦した。營壁とは恐く後世の塙に相當するものであろう。^⑥

倫は營長として軍事行動に従うとともに、又一方地方長官とも接觸をもった。時の京兆尹鮮于褒は倫の才能を見抜き、彼を郡吏に署した。その後褒は事件に連坐して高唐（山東）令に轉じたが、代つて京兆尹になった蓋延^⑦の下にあって倫は不遇をかこっていた。

「蓋延爲京兆尹、事多犯法、倫數諫爭不合、遂沈滯曹吏、」（後漢紀）

倫は郷閭夫として徭賦を平にし、怨結を理め、人の歡心を得ていたのであるが、ここにいたって彼は突如として商人の道に入る。

「自以爲、久官不達、遂將家屬、客河東、變名姓、自稱王伯齊、載鹽往來太原上黨、所過輒爲糞除而去、陌上號爲道士、親友故人莫知其處、」

彼は河東（山西）に客居し、この地に産する解鹽を扱って、太原・上黨方面にも往來した。ここに見える道士は勿論道教とは關係なく、道路掃除をした所から出たものであらう。

こうして數年の間商業に従事していたが、謁者となって車駕に従って長安に來た鮮于褒の推薦をうけて、京兆尹閭興に辟召されることになる。興は倫の商人としての經驗を認めたのであらうか、長安の市場の監督を命じ、鑄錢の事をつかさどらせた。

「閭興即召倫爲主簿、時長安鑄錢多姦巧、迺署倫爲督鑄錢掾、領長安市、倫平銓衡、正斗斛、市無阿枉、百姓悅服、」

長安郡吏時代の倫のエピソードが一つ、後漢書に見える。彼は光武帝の發する詔書の文章に非常に感心したようである。

「每讀詔書、常歎息曰、此聖主也、一見決矣、等輩笑之曰、爾說將尚不下、安能動萬乘乎、倫曰、未遇知己、道不同故耳、」

先に商人になった時にもそうであったように、地方の一屬吏で終りたくないという気持ちちが動いていたのであらう。

二 地方官時代

建安二七年（五一）、五〇歳に近くなつて、第五倫はようやく孝廉にあげられ郎中に除され、ただちに淮陽國醫工長に補

された。淮陽王劉延は、郭皇后所生の皇子で、明帝の時に姦猾を招き、圖讖をなしたかどを以て、阜陵王に貶されたので、後漢書卷七二光武十王傳には阜陵質王延として、その傳が見える。なお醫工長とは、後漢書卷三八、百官志王國に、「醫工長、本注曰、主醫藥、比四百石、」

とある。

光武帝は第五倫が淮陽王にしたがつて任地に赴くときこれを召見し、その才能に注目した。二九年(五三)、淮陽王が官屬を従えて朝見に來た際、再び倫を召し出して政治上の意見を聞き大に悦び、ついに彼を扶夷長(湖南)に任じたが、いまだ任地に到着する前に、さらに會稽太守(浙江)に拜した^⑩。太守として赴任するや親ら馬の秣を切り、妻は手ずから炊事をして俸祿の出費を切りつめ、こうして餘ったものを貧民に分ち與えたという。しかしこの行爲は後漢書の著者范曄からは、

「君子侈不僭上、儉不偪下、豈尊臨千里、而與牧圉等庸乎、詎非矯激、則未可以中和言也、」
と評される。

ついでに彼の爲人について述べると、本傳には、

「性質慤、少文采、在位以貞白稱、時人方之前朝貢禹、然少蘊藉、不修威儀、亦以此見輕、」
とある。

さて會稽には牛を犠牲にして神を祭る習俗があり、漸く人々を苦しめるようになった。

「會稽俗多淫祀、好卜筮、民常以牛祭神、百姓財產以之困匱、其自食牛肉、而不以薦祠者、發病且死、先爲牛鳴^⑪、」
歴代の郡守たちは之を放任していたが、倫は淫祠邪教とみなして禁止し、鬼神に假託して人々を恐怖におとし入れていた巫祝を厳しく處断しようとした。

一體、會稽の地はかつての越の國であり、そこには中原とは價值體系を異にした傳統に立つ文化が存在していた。會稽

の人々の牛祭りの俗信もそのような傳統に立脚したものではあつたろうが、倫の眼には淫祀としてしか寫らなかつたのであろう。したがって住民の側からは傳統の破壊に對する抵抗も生じた。「民初頗恐懼、或祝詛妄言」(後漢書)、「倫乃禁絕之、掾吏皆請諫不可」(後漢紀)「民初恐怖頗搖動不安」(同)などの語は之を示そう。倫はこれ押し切つて牛祭りの禁止を斷行するが、倫が反對する掾吏たち、彼等が會稽出身の人士たる事、更めて言うまでもないが、彼らを説得した言葉が後漢紀に載せられている。それは黄老を好んだものの言というより、儒學の徒のそれである。

「倫曰、夫建功立事在於爲政、爲政當信經義經言、淫祀無福、非其鬼而祭之、詔也云々」

かくて倫は敢然として淫祠と信ずる習俗の禁止を斷行した。

「倫到官、移書屬縣、曉告百姓、其巫祝有依託鬼神、詐怖愚民、皆案論之、有妄屠牛者、吏輒行罰、民初頗恐懼、或祝詛妄言、倫案之愈急、後遂斷絕、百姓以安、」

明帝の永平五年(六二)、第五倫は法に觸れて京師に呼び返されることになった。會稽では老若を問わず、車にとりすがり馬の首を叩いて引きとめようとした。解任反對の大デモンストレーションが展開されたのである。倫はひそかに海上を船で行き會稽より脱出したが、それでも千人餘りの人が廷尉の役所に押しかけて來、折からの梁松の事件の取調べと重なつて、廷場は大混亂を來し、明帝は「梁氏及び會稽太守に關して上書するものは、一切受けつけるな」との詔敕を出す程であつた。

郷里に歸ることを許された第五倫は自ら耕種し、世間と交る事のない生活を數年續けた。こうして永平八年(六五)宕渠令に拜されて四川に赴いた。彼はこの地に四年いたが、その間に後に大司農に進んだ玄賀を顯拔した。華陽國志卷一巴志宕渠郡の條に、大司農玄賀の名が見えるし、梁益寧三州先漢以來士女目錄には「政事大司農玄賀字文和宕渠人也」とある。

續いて彼は蜀郡太守に遷り、七年間在職して、明帝時代を終える。倫は太守となつて富裕な出身の掾史を罷めさせて、

孤貧志行の人を選んだので、賄賂のやり取りがなくなったという。

「蜀地肥饒、人吏富實、掾史家貲多至千萬、皆鮮車怒馬、以財貨自達、倫悉簡其豐贍者遣還之、更選孤貧志行之人、以處曹任、於是爭賂抑絕、文職修理、所舉吏多至九卿二千石、時以爲知人、」

華陽國志卷三蜀郡の條には、

「其太守著德垂績者、前漢莫聞、建武以來有第五倫、廉范淑度、特垂慈愛、」

と蜀郡良二千石の先頭に置かれる。

三 三公就任

永平一八年（七五）、明帝没し章帝が立つと、彼は一躍牟融に代って三公の一たる司空に拔擢された。

「肅宗初立、擢自遠郡代牟融爲司空、」

一般には蜀郡のような遠郡から、河南尹など京師に近い地方の太守となり、そして九卿に任ぜられて三公に進むのであるから、異例の拔擢といわねばならない。第五倫七十歳ころのことと思われる。華陽國志にも、

「漢中趙瑤自扶風太守來之郡、司空張溫謂曰、第五伯魚從蜀郡爲司空、今掃吾第以待足下、」

とあり、當時非常に注目され、人々の關心をそそった人事であったようである。

三公になってからの第五倫の言動は、外戚の進出をいかに抑えるかということにかかっていた。彼は外戚の政治進出を抑えることが、漢朝を永續させ、又外戚家自身を破滅から守ることであると考えている。

第五倫が外戚の進出に對して、これを止めるべきであるとの意見を出したことを述べる前に、彼の關係した一つの政治事件について觸れておこう。これは後漢書の第五倫傳には見えず、卷七八楊終傳に出てくる。

楊終は蜀郡成都の人。十三歳で郡の小吏となり、太守にその才能を認められ、京師に上って春秋を學んだ。明帝は終を

蘭臺に召し、校書郎に任じた。^④ 章帝の建初元年に大旱が起り、穀價が騰貴した。終はその原因を、

「廣陵・楚・淮陽・濟南之獄、徙者萬數、又遠屯絕域、吏民怨曠、」

に求め、その對策として、法を弛め、屯田を廢止する事を説いた。明帝の時代には同姓諸王の下獄する事件が、つぎつぎに起り、又匈奴征伐などの外征が行なわれた。明帝は武帝の政策を意識していたのではないかと思われる。楊終の上疏は以下のようである。

「臣聞、善善及子孫、惡惡止其身、百王常典、不易之道也、秦政酷烈、違悟天心、一人有罪、延及三族、高祖平亂、約法三章、太宗至仁、除去收孥、萬姓廓然、蒙被更生、澤及昆蟲、功垂萬世、陛下聖明、德被四表、今以比年久旱、災疫未息、躬自菲薄、廣訪失得、三代之隆、無以加焉、臣竊按春秋水旱之變、皆應暴急惠不下流、自永平以來、仍連大獄、有司窮考、轉相牽引、掠考冤濫、家屬徙邊、加以北征匈奴、西開三十六國、頻年服役、轉輸煩費、及遠屯伊吾・樓蘭・車師・戊己、民懷土思、怨結邊域、傳曰、安土重居、謂之衆庶、昔殷人近遷洛邑、且猶怨望、何況去中土之肥饒、寄不毛之荒極乎、且南方暑濕、障毒互生、愁困之民、足以感動天地、移變陰陽矣、陛下留念省察、以濟元元、」
この上奏文にもとづいて、三公らは意見を求められたが、第五倫が楊終の意見に賛成しただけで、太尉牟融、司徒鮑昱そして校書郎の班固らは「施行既久、孝子無改父之道、先帝所建、不宜回異、」という理由で批難した。^⑤ しかし楊終の再度の上疏があり、この問題は徙者を還し邊屯を罷めることに決定された。

四 馬氏の進出

一般に章帝の時代までは、皇帝の親政が行われ、外戚の禍は起らなかったとされる。事實章帝は三十一歳で即位し、馬太后が垂簾の政をひく必要もなく、又彼女も謙抑につとめ、一族の政治容喙を抑制していたので、王朝の體制を危機におち入らせることはなかったが、それでも一時期を限って言えば、馬氏の政治進出はかなりはげしいものがあつたのである。

第五倫傳には彼が外戚の專權を抑損する上奏を行ふようになった背景を次のように記す。

「帝以明德太后故、尊崇舅氏馬廖兄弟、並居職任、廖等傾身交結、冠蓋之士爭赴趣之、倫以后族過盛、欲令朝廷抑損其權、」

馬太后には子供がなく、賈貴人の生んだ章帝が即位したわけであるが、後漢書卷一〇九下、儒林傳楊仁傳には、明帝が崩じた際に、宮中において、すでに勢力を持っていた馬氏を中心に、一連の不穩な動きがあったことを推測させる記事がある。

「楊仁字文義、巴郡閬中人也、建武中、詣師學習韓詩……顯宗（明帝）特詔補北宮衛士令、引見問當世政迹、仁對以寬和任賢、抑黜驕威爲先、……及帝崩時、諸馬貴盛、各爭欲入宮、仁被甲持戟、嚴勒門衛、莫敢輕進者、」

王先謙は諸馬が北宮に入らんとしたのは、

「欲入北宮謁后也、」

というが、當ていよう。

次に章帝の即位後、馬氏が占めるにいたった官職を見ていこう。

・馬廖（馬援の子、馬皇后の兄、少以父任爲郎、東觀記曰、廖少習易經、清約沈靜、援擊武谿無功、卒于師、廖不得嗣爵、明德皇后既立、拜廖爲羽林左監、虎賁中郎將、顯宗崩、受遺詔、典掌門禁、遂代趙熹爲衛尉、

・馬防（馬援の子、馬皇后の兄、廖の弟）^①永平十二年（六九）與弟光俱爲黃門侍郎、肅宗即位、拜防中郎將、稍遷城門校尉、^②

・馬光（馬援の子、馬皇后の兄弟、廖・防の弟）^③自越騎校尉、遷執金吾、

なお馬光が執金吾になったのは、建初三年（七八）馮魴がその職を退いてからのことで、それ以前は越騎校尉であったろう。

・馬嚴（援兄子）肅宗即位、拜侍御史中丞、除子縛爲郎、^④

つぎにここに見える官職がどのようなものであるかを述べねばなるまい。

羽林左監は光祿勳に屬し、秩は六百石。羽林左騎をつかさどる。その羽林左騎は羽林中の才有るものより選ばれたのであって、羽林郎は、

「掌宿衛侍從、常選漢陽・隴西・安定・北地・上郡・西河凡六郡良家、」

と見える。

虎賁中郎將はやはり光祿勳の屬で、比二千石、

「主虎賁宿衛、」

とある。虎賁の名稱については種々の説があるが、要するに勇猛な軍士であつた。

衛尉は九卿の一。中二千石。

「掌宮門衛士、宮中徼循事、」

とある。

黃門侍郎。少府の屬で六百石。

「無員、掌侍從、左右給事中、關通中外、及諸王朝見、於殿中引王就座、」

とあり、しばしば外戚の一族の者が任命される官である。

城門校尉・越騎校尉はともに比二千石。それぞれ洛陽城門十二所及び宿衛の兵を掌る。そして御史中丞は千石、侍御史はその屬官の一で六百石、少府に屬する。その職掌は、

「御史中丞、御史大夫之丞也、舊別監御史、在殿中密舉非法、及御史大夫轉爲司空、因別留中、爲御史臺率、後又屬少府……侍御史掌察舉非法、受公卿郡吏奏事、有違失、舉劾之、」

とあり、監察の官である。

このように見てくると、章帝即位の直後にあって、馬氏は宮中や城門の守備隊の指揮權を握り、監察の權も掌握してい

た。かつて光武帝の時に、竇融とその弟の竇友が、衛尉及び城門校尉に任ぜられたので、人々は、

「兄弟並典禁兵、」

と評したが、これはそのまま馬氏一門にあてはまる。

以上話が多岐に渡ったが、第五倫が第一回の外戚抑損を説いた頃の情勢はこのようなものであった。

五 第一回の上奏

さて第五倫の最初の上奏は次のように始る。

「臣聞、忠不隱諱、直不避害、不勝愚狷、昧死自表、書曰、臣無作威作福、其害于而家、凶于而國、尙書洪範之言傳曰、大夫無境外之交、束脩之饋、穀梁傳之文也、」

まず彼は書經の中から、臣が分を越えて、威をなし福をなすことをいしましめた箇所を引き、さらに春秋三傳中、天子絶對神聖の立場に立つ穀梁傳の隱公元年に關聯する言葉を引いている。これは官僚として活躍してきた倫にもっともふさわしいものと言えよう。そして古典の引用は冒頭の一節のみで、以下は馬氏の現實の姿がこの原則にそむき、かつては章帝に至るまでの後漢二代にわたる外戚への對策にもとることを説明しながら論を進める。

「近代光烈皇后雖友愛天至、而卒使陰就歸國、徙廢陰興賓客、其後梁竇之家、互有非法、明帝卽位、竟多誅之、自是洛中無復權戚、書記請託一皆斷絕、又譬諸外戚曰、苦身待士、不如爲國、戴盆望天、事不兩施、司馬遷書曰、僕以爲戴盆何以望天也 臣常刻著五藏、書諸紳帶、」

光武帝の皇后南陽の陰氏と、外戚ではないが、姻戚として勢威を振った梁氏・竇氏が自發的に身を退き、或いは皇帝權力に抑えられていったことを記す。

陰就・陰興の事は、卷六二の陰興傳を見ても、事情をくわしくする事はできない。梁氏については註⑮にも述べた所で

あるが、

〔梁〕松敷爲私書、請託郡縣、（永平）二年、發覺免官、遂懷怨望、四年、冬、乃縣飛書誹謗、下獄死、」（卷六四梁松傳）

とある。竇氏については詳細を省くが、

〔竇〕穆等遂交通輕薄、屬託郡縣、干亂政事、以封在安豐、欲令姻戚悉據六安國、遂矯稱陰太后詔、令六安侯劉盱去婦、因以女妻之、

というような事があり、やがて竇氏は竇固のみを除いて獄死させられてしまった。なお司馬遷書曰云々は、漢書司馬遷傳の有名な任少卿に與える書中に使われている言辭である。

さて第五倫はつづいて馬氏の現状に及んでいく。

「今之議者、復以馬氏爲言、竊聞、衛尉廖以布三千匹、城門校尉防以錢二百萬、私贍三輔衣冠、知與不知、莫不畢給、」馬廖と馬防は自分たちの本籍である三輔の衣冠とあるから、知識人や官僚たちの、知ると知らざるとを問わず、金品を施している。さらに十二月の臘祭には洛陽にある衣冠の土に金錢を與え、馬光は經義に違つて、臣下としての分を越えて祭りを行っていた。作威作福にあたるものである。

「又聞、臘日亦遺其在洛中者、錢各五千、越騎校尉光、臘用羊三百頭、米四百斛、肉五千斤、臣愚以爲、不應經義、惶恐不敢以不聞、」

倫はさらに馬氏の勢力を抑制することが、かえって馬氏を永續させる道であると結ぶ。

「陛下情欲厚之、亦宜所以安之、集解先謙曰宜下奪一思字 臣今言、此誠欲上忠陛下、下全后家、裁蒙省察、」倫の意見は採用されなかった。

六 第二回の上奏

建初元年から二年にかけて、馬氏の勢力は擴大していった。馬殿は建初元年に五官中郎將となり、その年の中にさらに長樂衛尉を兼ねた。又その三子が郎に除せられた。長樂衛尉は長樂宮の警衛にあたる。しかし建初二年には陳留太守に任ぜられて京師を離れた。

建初二年、金城・隴西の羌が反した。朝廷は馬防に行車騎將軍の肩書を加えて出征せしめた。翌三年一連の戦鬪が成功に終った後、馬防は眞車騎將軍となり、城門校尉をそのまま兼ねることになった。

「防貴寵最盛、與九卿絕席、」

と記されている。一方馬光は前にも述べたように執金吾となった。執金吾は九卿には數えられないが、中二千石で、

「掌宮外戒司非常水火之事、月三繞行宮外及主兵器、」

と見えるように首都の宮外の警衛と武器庫の管理に當る。

第五倫の第二の意見書は、馬防が車騎將軍に任じられたことを取りあげる。此の文章も第一のそれと同じく、冒頭の一節に一般論を述べ、直ちに實例を挙げ本論に入ってゆく。

「臣愚以爲、國威可封侯以富之、不當職事以任之、何者繩以法則傷恩、私以親則違憲、」

外戚には封侯はいくら増してもよいが、實職に任ずる事はよくないという。これによく似た論理は、曹操が宦官排斥論に答えた言葉にも見える。

「魏書曰、太祖聞而笑之曰、闔豎之官、古今宜有、但世主不當假之權寵、」

第五倫の上奏はつづいて次のように述べる。

「伏聞、馬防今當西征、臣以、太后恩仁、陛下至孝、恐卒有纖介、難以意愛、聞防請杜篤以從事中郎、多賜財帛、篤

爲郷里所廢、客居美陽、女弟爲馬氏妻、恃此交通、在所縣令、苦其不法、收繫論之、今來防所議者、咸致疑怪、況乃以爲從事、將恐議及朝廷、今宜爲選賢能以輔助之、不可復令防自請、人有捐事望、苟有所懷、敢不自聞、」

これは馬防が杜篤を從事中郎になさんことを請うたのに對して、杜篤が郷里からも擯拆されるような人物であることを指摘し、人事は慎重に行われねばならぬ事を論じたのである。この考えは倫の第三の上奏においても、ふたたび展開される。

さて杜篤の事は後漢書一一〇上文苑傳に見える。そこに述べられていることは、全く倫の上奏を裏書きしているということが出来るであらう。

杜篤は京兆杜陵の人というから、第五倫とは同郡の出身ということになる。杜陵は宣帝の陵墓の地である。このことは杜氏も亦第五氏などと同じ様に、他郡より遷徙させられてきたものである事を推測させる。はたして前漢書卷六〇杜周傳を見ると、周は南陽杜衍の人とあり、彼は武帝の時代に御史大夫（三公の一）にまで進んだが、茂陵に徙つて來、その子の杜延年は宣帝の時に、やはり御史大夫になったが、杜陵に遷っている。この杜延年が杜篤の高祖にあたる。又杜篤の外高祖は宣帝のころに破羌將軍として活躍した辛武賢であつた。篤は常にその事を意識しておつたようで、杜篤傳には、

「杜氏文明善政、而篤不任爲吏、辛氏秉義經武、而篤又怯於事、外内五世、至德衰矣、」

と歎じた事が見える。こうした名族意識と——事實馬氏と姻戚關係に入れるということが、その名族である證左であるが——それと文士肌の所から、

「博學不修小節、不爲郷人所禮、」

という批難を受けることになったのであらう。かくて第五倫の上表中にも見える事であるが、美陽（陝西省武功縣）に客居して、ここで請託事件をひきおこす。

「居美陽、與美陽令游、數從請託不諧、頗相恨、令怨收篤送京師、」

京師で篤が下獄していた時、大司馬吳漢が死に（建武二〇＝紀元四四）、光武が諸儒に詔して誅辭を作らせた所、篤が獄中よ

り贈ったものが最高となり、光武帝は篤の刑を免じてやった。^⑤ つづいて彼はその代表作とも言うべき『論都賦』を作る。これは篤の傳に、

「篤以、關中表裏山河、先帝舊京、不宜改營洛邑、迺上奏論都賦、」

とあるように、洛陽と長安を取りあげて、その何れが王朝の都にふさわしいかを述べたもので、その意味では班固や張衡の「二都賦」「兩都賦」の先驅をなしたとも言えよう。

篤は後、郡の文學掾となったが、目疾のために、二十年餘り京師を關うことがなかった。ようやく建初三年にいたって馬防の從事中郎となったのであるが、結局射姑山の戦で戦死した。子の碩は豪俠な人物で、貨殖を以て世に聞えたのである。^⑥

杜篤は馬氏の姻戚でもあったわけだが、馬氏の周辺には、なお幾人かの文士・學者を見出すことができる。當時政治的に勢威を振った人物の下に、數多くの學者や文士——その中には後世の學術史や文學史に名を遺す人物も含まれている——が集ったことは、第五倫の第三の上奏文にも見られる所であり、倫はそれを激しく攻撃するのであるが、後漢時代の文化を考える上にも注目すべき現象であろう。

以下簡単に馬氏とその周辺の人物を見ていくことにする。

李育、扶風漆の人。公羊春秋を習い、「難左氏義四十一事」を著わした。すでに明帝の初めに、同郡の班固の推薦によって、驃騎將軍東平王の劉蒼に仕えたこともあったが、建初元年に、衛尉馬廖によって賢良方正に舉げられ、議郎から博士となり、建初四年の白虎觀論議にも参加する。そして尙書令に遷るが、馬氏の失脚とともに「爲所舉」に坐して免職された。

第三章に觸れた楊終も馬廖と善く、彼は馬氏の側に立ち、馬氏の事を憂えて廖に意見をしたことが楊終の傳に見える。それからこれは實現はしなかったが、後漢書卷六九江革傳には、

「京師貴戚衛尉馬廖、侍中竇憲慕其（江革）行、各奉書致禮、（江革）革無所報受、」と見える。

傳毅、この迪志詩の作者も馬氏と結びついていた時がある。傳氏も扶風茂陵の人であったが、少いころより博學で知られ、永平年間に迪志詩を作っていたが、建初年間に章帝がひろく文學の士を召した際に蘭臺令史となり、ついで郎中に拜されて、班固・賈逵と校書を典り、顯宗頌十篇を作ります。そこで車騎將軍馬防に請われて軍司馬となり、師友の禮をもつて待遇されたが、馬氏の失脚とともに、免官されて故郷に歸った。

「車騎將軍馬防、外戚尊重、請（傳）毅爲軍司馬、待以師友之禮、及馬氏敗、免官歸、」
以上が馬氏と關係のあつた文士・學者達である。

七 第三回の上奏

第五倫の第二の上奏も亦、取りあげられなかった。馬氏の勢威は、建初四年（七九）の馬皇后の死を挟んで八年（八三）ごろまでつづいて失脚し、これに變つて竇氏即ち章帝の皇后家が擡頭してくる。

。馬廖 建初四年、遂受封爲順陽侯、以特進就第、

。馬防 建初四年、封潁陽侯（六千石）、以顯宗寢疾入參醫藥、又平定西羌增邑千三百五十戶、以特進就第、皇太后崩、明年拜光祿勳、數言政事、多見採用、七年賜故中山王田廬、

。馬光 建初四年、封許陽侯（六千戶）、皇太后崩、光爲衛尉、

。馬嚴 典（陳留）郡四年、坐與宗正劉軾、少府丁鴻等、更相屬託、徵拜太中大夫、十餘日遷將作大匠、

。馬豫（廖の子）爲步兵校尉、

。馬鉅（防の子）爲常從小侯、六年正月以鉅當冠、特拜黃門侍郎、肅宗親御章臺下殿、陳鼎俎、自臨冠之、

ここで再び馬氏の任じられた官について觸れておく。

光祿勳 九卿の一、掌宿衛宮殿門戶典謁署郎更直執戟宿衛門戶考其德行而進退之

將作大匠 二千石 掌修作宗廟路寢宮室陵園木土之功并樹桐梓之類列于道側

步兵校尉 比二千石 掌宿衛兵、北軍中侯に屬する。

馬氏の占めた官職は第四章で述べたものの延長線上にあると云えよう。かくして、

「防兄弟貴盛、奴婢各千人已上、資産巨億、皆買京師膏腴美田、又大起第觀、連閣臨道、彌互街路、集解惠棟曰、東觀記、近帶城郭、妨困小民多聚聲樂、曲度比諸侯廟、賓客奔湊、四方畢至、京兆杜篤之徒數百人、常爲食客居門下、刺史守令多出其家、歲時賑給、鄉閭故人莫不周給、防又多牧馬畜、賦斂羌胡、」

と馬防兄弟を中心にして、地方政治にまでもその影響力を及ぼし、異民族をも苦しめていった。しかも馬廖は「性寬緩、不能教勸子孫」という状態であつた。前に述べた楊終が馬廖を戒めたのは、このころの事である。

「時太后兄衛尉馬廖、謹篤自守、不訓諸子、（楊）終與廖交善、以書戒之曰、終聞、堯舜之民可比屋而封、桀紂之民可比屋而誅、事見陸賈新語何者堯舜爲之隄防、桀紂示之驕奢故也、詩曰、皎皎練絲、在所染之、上智下愚、謂之不移、中庸之流、要在教化、春秋殺太子母弟直稱君甚惡之者、坐失教也、公羊傳曰云々 禮制、人君之子年八歲、爲置少傅、教之書計、以開其明、十五置太傅、教之經典、以道其志、漢興、諸侯王不力教誨、多觸禁忌、故有亡國之禍、而乏嘉善之稱、今君位地尊重、海內所望、豈可不臨深履薄、以爲至戒、黃門郎年幼血氣方盛、廖子防及光俱爲黃門郎既無長君退讓之風、而要結輕狡、無行之客、縱而莫誨、視成任性、鑒念前往、可爲寒心、君侯誠宜以臨深履薄爲戒、」

しかし馬廖はこの誠告を聞き入れなかった。かくして八年に至り、馬豫の事件が起り馬氏は失脚した。

「（馬）豫遂投書怨誹、又（馬）防（馬）光奢侈好樹黨與、八年有司奏免豫遣廖防光就封、」（馬廖傳）

「八年因兄子豫怨誹事、有司奏防兄弟奢侈踰僭、獨亂聖化、」（馬防傳）

馬氏の失脚により竇氏が擡頭していった様子を、次に簡単に見てみたい。

竇氏は扶風平陵の人で、竇融が後漢の開國に功があつたので、光武末・明帝初には「一公二侯三公主四二千石」と呼ばれるまでに勢力をのばした。その後明帝の永平五年に竇穆の事件で失脚したが、明帝末に竇固が外征に参加して再び勢力を盛り返した。さらに章帝の皇后を出してその地位を確固にしつつあつた。

竇皇后は建初二年（七七）に貴人として宮中に入り、翌三年皇后に立てられたのであるが、すでに外征の功により永平十八年（七五）大鴻臚に任じられていた竇固は、建初七年（八二）馬防に代つて光祿勳に、翌八年には馬光に代つて衛尉となつた。そして皇后の兄竇憲・竇特もそれぞれ侍中虎賁中郎將、黃門侍郎に任ぜられていった。かつて馬氏の占めた位置は竇氏に取つて代られた。

竇氏の進出を最初に仇敵視したのは馬嚴であつた。彼は建初二年に陳留太守を拜して京師を離れるにあたり、章帝に向つて、竇氏を宮中に入れてはならないと、次のように言っている。

「昔顯親侯竇固、誤先帝出兵西域、置伊吾盧屯、煩費無益、又竇勳受誅、其家不宜親近京師、」

この言葉は當然竇氏の耳に入り、兩家の確執が起つた。

「是時（竇）勳女爲皇后、竇氏方寵、時有側聽（馬）嚴言者、以告竇憲兄弟、由是失權貴心、」

このように馬竇兩氏の間に交代はあつても、依然として外戚の勢力が除かれたいのを見、第五倫は建初八年に第三回目の外戚抑損の上奏を行う。この建初八年というのは、前年に宦官蔡倫らを使って宋貴人を追い落し、宋貴人所生の皇太子劉廢を廢し、後の和帝を皇太子に立てた竇氏が、さらに和帝の生母梁貴人を殺し、後宮においての地位を安定にした年である。

さてその上奏は次のようなものであつた。

「及諸馬得罪歸國、而竇氏始貴、倫復上疏曰、臣得以空虛之質、當輔弼之任、素性驚怯、位尊爵重、拘迫大義、思自

策厲、雖遭百死、不敢擇地、又況親遇危言之世哉、論語孔子曰、邦有道、危言危行、邦無道、危行言遜^⑧、今承百王之敝、人尙文巧、咸趨邪路、莫能守正、

最初の一句は上に述べた馬・寶交代の事を記したのである。そして第五倫の前二回の上奏と同じように、一般論を展開して、具體例に迫っていく。

「伏見、虎賁中郎將寶憲、椒房之親、典司禁兵、出入省闈、年盛志美、卑謙樂善、此誠其好士交結之方、然諸出入貴戚者、類多瑕釁禁錮之人、尤少守約安貧之節、士大夫無志之徒、更相販賣、雲集其門、衆熙飄山、聚蚊成雷、前書中山靖王之語^⑨、蓋驕佚所從生也、三輔論議者至云以貴戚廢錮、當復以貴戚浼濯之、猶解醒當以酒也、詖險趨勢之徒、誠不可親近、臣愚願陛下中宮、嚴敕憲等、閉門自守、無妄交通士大夫、防其未萌、慮於無形、令憲永保福祿、君臣交歡、無纖介之隙、此臣之至所願也、」

寶憲の周邊には貴戚の門に出入して私利にあずからんとする瑕釁禁錮の人、無節操な士大夫が集ってきて、自らを賣りこもうとする。恐らく馬氏に連座して官利身分を剝奪されたものも含まれているのであろう。しかしこういう人物を近づけてはいけない。そうすることにより、寶氏は長く福祿を得るのであると言う。第一・第二の上奏とはぼ同じ論理に立って展開されている。

しかし恐らく此の奏も取りあげられなかったであらう。章帝没後、寶氏の專權は甚しくなり、ついに天子の弑廢を企圖し、寶氏は逆に滅亡するに至るのである。

第五倫が老病を以て司徒を免ぜられたのが、元和三年（八六）であり、それから數年にして卒したのであるから、寶氏の滅亡を目にすることはなかった。

おわりに

以上、本稿の前半においては、第五倫の生涯の軌跡を主として追ってみた。即ち彼が兩漢交替期という變動の時代にあつて、少くして營壘の長となり、一時は商人に身を落したが、やがて地方官に任じられ、郷舉里選のルールに従つて昇進し、地方長官に任じられて、循吏として活躍し、とくに地方の傳統的風習の解消と、それによつて生じるであろう畫一化に力をかし、名聲を得た。やがて異例の拔擢をうけて三公にと進む。

後半においては、彼が三公時代に、三回に渡つて上奏するほど問題視した外戚、特に馬氏の進出について若干の考察を加えた。外戚が任命される一定の官職のある事、外戚と學者・文人との結びつきについても觸れてみた。これらの事は、馬氏以外の外戚の進出の経緯などを述べなければ、より完全なものとはなり得ないのであるが、それは他日を期したい。

註

① 前漢時代には強幹弱枝の政策のもとに、地方の豪族がしばしば長安の近くに徙されていることあらためて述べる迄もないことである。ところで後漢初期に活躍する人物の多くは、光武の同郷である南陽の出身者か、長安附近のこれら遷徙者の子孫であるといつても過言でない。後者に屬する例をいくつかあげておく。

。馬氏 明帝の皇后を出し、章帝時代に外戚として勢威を振い、第五倫が議論の對象として取上げる。この家は戰國趙の將軍趙奢の子孫で、武帝の時代に吏二千石を以て邯鄲（河北）から扶風茂陵に遷されている。茂陵は武帝の陵名である。

。竇氏 光武から明帝時代に一族から一公兩侯三公主四二千石を出し、一時衰退したが、章帝の皇后を宮中に送つて勢いを盛返し、和帝時代に外戚として勢威を振つた。第五倫も議論の對象としている。この家はもと常山（河北）の貧民であつたが、

文帝の皇后を出して富裕となり、宣帝の時代に扶風平陵に徙されてきた。平陵は昭帝の陵名である。

。梁氏 順帝から桓帝の時代にかけて外戚として活躍し、梁冀は跋扈將軍と稱された。後漢初期より豪族としての地位を保ちつづけたが、その先祖は賁十萬を以て茂陵に遷されている。

。耿氏 後漢初期以來、多くの將軍などを生んでいるが、扶風茂陵の人。武帝の時吏二千石を以て鉅鹿から移された。

。公孫氏 公孫述が兩漢交替期に、巴蜀の地に獨立國を建てた。扶風茂陵の人であるが、後漢書卷四三注引東觀漢記によれば、その祖は武帝の時に吏二千石を以て無鹽（山東）からこの地に遷されてきた。

。班氏 漢書の著者班固らを出したが、扶風安陵の人。財を以て樓煩（山西）におり、この地に徙された。安陵は惠帝の陵名である。

② 前漢末、各地にこの種の營が築かれていた。

「時三輔大飢、人相食、城郭皆空、白骨蔽野、遺人往往聚爲營保、各堅守不下、」(後漢書卷四一 劉盆子傳)

第五倫の營壁はこの一つであつたらう。

「孫堪……河南緱氏人也、明經學、有志操……王莽末、兵革並起、宗族老弱、在營保間、堪常力戰陷敵、無所回避、數被創刃、宗族賴之、郡中咸服其義勇、」(後漢書卷一〇九下 儒林傳周澤傳附孫堪傳)

これは河南緱氏(河南省偃師縣)の例である。

「樊宏與宗家相屬、作營壘自守、老弱歸者千餘家、」(後漢書卷六二 樊宏傳)

これは南陽の例である。なお後漢初にすでに塢候の名の見えることは、

那波利貞「塢主考」(東亞人文學報三卷四號 又史窓三十號 那波利貞先生追悼號)

を参照されたい。

③ 後漢書卷四八 蓋延傳及び第五倫傳注引華嶠書によれば、蓋延は左馮翊であり、京兆尹にはなっていない。なお彼が三輔に赴任したのは建武十一年(三五)で、四年間その職にあつて病死した。

④ 「蓋延代鮮于嬰爲馮翊、多非法、倫敦切諫、延恨之、故滯不得舉」(華嶠書)

⑤ 後漢紀は王伯春に作る。

⑥ 後漢紀による。

⑦ 將とは州將の意で、章懷太子はその州將に蓋延をあてている。

⑧ 後漢書には除郎中の三字はない。

⑨ 光武本紀には、「建武二十八年淮陽王始就國」と見え、二十九年には入朝の記述はなく、中元元年(五六)に至つて東海王彊らとともに入朝している。

⑩ 後漢紀では宛に至つた時に會稽に遷つたことになっている。

⑪ 後漢紀には、

「會稽俗信淫祀、皆以牛羊請禱、」

と牛の下に羊の字がある。

⑫ 後漢紀には、

「是以財盡於鬼神、產盡於祭祀、或家貧不能以時禱祀、至諱言牛、不敢食其肉、發病且死、先爲牛鳴、其畏懼如此、」とある。

⑬ 論語爲政篇「子曰、非其鬼而祭之、諂也、見義不爲、無勇也、」以下に述べる事件が、梁松の事件と同じ年にあつたとするなら、永元四年の事となる。

⑭ 梁松の事件とは彼が飛書により下獄して死んだことをさす。益部耆舊傳には、

「賀字文和州辟爲從事、舉姦摘伏、口人無怨、」

と見える。

⑮ この太守が第五倫を指すのかどうかは分らない。

⑯ 周壽昌が彼を公羊學者とするのは、従うべきであらう。

⑰ 華陽國志一〇上によれば、班固・賈逵とともに校書郎になつた。

⑱ 後漢紀では鮑昱も亦、明帝時代の大獄で邊地に徙されたものを本郡に還らすよう上疏している。鮑昱の態度はなお一考を要

しよう。

② 後漢書七八楊終傳注には「廖子防及光、俱爲黃門郎、」とあるが、後漢書卷一〇上馬皇后紀、同卷五四馬援傳などによつて、馬援の子、馬皇后兄弟とし、楊終傳注説はとらない。

③ 馬防は黃門侍郎であつたとき、醫藥をもつて病氣の顯宗（明帝）に侍したことがある。

「防以顯宗寢疾、入參醫藥、」（馬防傳）「（馬皇后）自撰顯宗起居注、削去兄防參醫藥事」（馬皇后紀）

註②に同じ。

④ 馮魴……永平七年（六四）代陰嵩爲執金吾……建初三年（七八）以老病乞身、肅宗許之……元和二年（八五）卒、時年八十六、（後漢書卷六三馮魴傳）

⑤ 王先謙の集解には、侍御史中丞について次のように記す。

「惠棟曰、徵拜侍御史、復遷中丞也、東觀記云、嚴拜御史中丞、賜冠幘衣服車馬、舉劾案章、申明舊典、奉法察舉、無所迴避、百僚憚之、」

とあり、侍御史から（御史）中丞に遷つたとみる説と、侍を衍字として、御史中丞になつたとする説とがある。

⑥ 馬嚴は馬氏一族の中で、馬援や馬皇后から信頼をうけた存在であつた。儒教の教養を持っていたが、一面輕薄な人物のようでもあつた。

彼は少い時から擊劍を好み、騎射を習い、武術を練るとともに、平原の楊太伯に従つて講學し、百家群言を覽、春秋左氏傳に通じた。又東觀記によれば、左傳學者である司徒祭酒陳元から春秋を受けたとある（狩野直喜「兩漢學術考」）。英賢と交結

し、京師の長者達もこれを才能ある人物とみた。しかし一面馬援が「誠兄子書」を出さねばならぬような「譏議を喜み、輕俠客と通ずる」所もあつた。

郡の督郵となつて、馬援からも信頼されて、常に相談にあずかり、家事を委ねられていた。馬援が死に、城西數畝の地に假埋葬しか許されなかつた時、援の冤罪を訴えて、ついに郷里で本葬をなすことを認められるにいたつたのも、馬嚴が援の妻子とともに願出たからであり、馬氏が援の死後、梁松・寶固らにおとしめられて振わなくなつたことを憂え、後の馬皇后になる從姉妹を宮中に送りこんだのも馬嚴であつた（絕竇氏婚求進女掖庭、卷一〇馬皇后紀）。

馬皇后が立后の際には、一時北地に移住し、賓客とも交りを断つていたが、永平十五年、皇后の命が降つて洛陽に出、明帝からも寵愛され、まず校書郎杜撫・班固らと建武注記を撰定し、宗室の劉復（光武帝の兄劉伯升の孫）らと政事を議論した。やがて將軍長史（恐らく征西將軍耿秉を指すのであろうが、それは永元十八年の事となる。或は度遼將軍來苗をさすか）に拜され、北軍五校の士、羽林の禁兵三千人を率いて美稷に出て南單于を衛護し、特に官屬を置くことを許され、地方長官からは將軍と同じ禮遇を受けた。章帝即位の年の冬（永平十八年十一月）に日食が起ると、次のような上疏をなしている。

「臣聞、日者眾陽之長、食者陰侵之徵、書曰、無曠庶官天工人其代之、言王者代天官人也、故考績黜陟、以明褒貶、無功不黜、明陰盛陵陽、臣伏見、方今刺史太守、專州典郡、不務奉事盡心爲國、而司察偏阿、取與自己、同則爲尤異、異則中以刑法、

不即垂頭塞耳、採取財賂、今益州刺史朱輔、揚州刺史倪說、涼州刺史尹業等每行考事、輒有物故、又選舉不實、曾無貶坐、是使臣下得作威福也、故事州郡所舉、上奏司直、察能否、以懲虛實、今宜加防檢、式遵前制、舊丞相御史親治職事、唯丙吉以年老優游不案吏罪、於是宰府爲常俗、更共罔養以崇虛名、或未曉其職、便復遷徙、誠非建官賦祿之意、宜敕正百司、各責以事、州郡所舉、必得其人、若不如言、裁以法令、傳曰、上德以寬服民、其次莫如猛、故火烈則人望而畏之、水懦則人狎而翫之、爲政者寬以濟猛、猛以濟寬、如此綏綱有體、災害消矣、」

その意見は受け入れられ、酺等の官が免ぜられた。

この上書の中に、臣下をして威福を作すを得しむとて刺史郡守を攻撃した句はそのまま、第五倫も馬氏攻撃に使っている。

②⑦ 蔡質漢儀曰……虎賁舊作虎奔、言如虎之奔也、王莽以古有勇士孟賁、故名焉、孔安國曰、若虎賁獸、言其甚猛、

②⑧ 前漢の王莽の如きはその一例である。

②⑨ 後漢書卷五王竇融傳。

③① これは尙書洪範の引用で、天が禹に與えた九類の第六「乂用三德」を箕子が敷衍した言葉の中にみえる。第五倫の引用は節録であり、洪範では次のようになる。

「臣無有作福作威玉食、臣之有作福作威玉食、其害于而家、凶于而國、人用側頗僻、民用僭忒。」

君主のみ人を賞し、人を罰し、珍味をそろえうる（吉川幸次郎「尙書正義」）ので、君主の地位を臣下に卓絶したものを見、臣下に権柄の分散することを戒め、もしそういうことが起ればその臣下の家が亡びるばかりか、國家そのものも亂れることを言

ったもので、馬氏の專横に對し、それは馬氏及び漢朝とともに危険な状態に陥し入れることを強調し、警告したわけである。なおこの洪範の文句は、註⑤馬嚴の上奏文中にも用いられていること、前述の通りである。

③① これは穀梁傳隱公元年十二月の條の傳文及びそれに關連する疏中に見える。傳文、

「冬十月二日、祭伯來、來者來朝也、其不謂朝何也、竇內諸侯、非有天子之命、不得出會諸侯、不正其外交、故不與朝也、聘弓鏃矢、不出竟場、束脩之肉、不行竟中、有至尊者、不貳之也、」

この傳文に對する疏の中に、

「臣無竟外之交、故弓矢不出竟場、」

「董仲舒曰、大夫無束脩之饋、言雖有異、其竟皆同也、」の語が見える。天子の命なしに諸侯が勝手に外交をなすことの不可なるを言ったもので、後に述べるように、馬氏が勝手に三輔や洛陽の士大夫に贈りものをするのが、經義に合わぬことを言う伏線としたのである。

③② 梁氏が外戚として活動するのは、順帝（桓帝の時であり、竇氏は和帝の時）に外戚として權力を振う。

③③ 梁氏では梁松が光武帝の女、舞陰長公主に尙しており、竇氏は「一公二侯三公主四二千石」（竇融傳）といわれるように、光武帝、明帝の頃に竇氏の三人が、公主に尙している。

③④ 建初元年遷五官中郎……數薦達賢能、申解冤結、多見納用、復以五官中郎將、行長樂衛尉事、二年拜陳留太守、その辭は後漢書吳漢の傳に見える。

③⑥ 後漢末から魏・晉にかけて、杜陵の杜氏からは、杜畿、畿の子の杜恕、恕の子の杜預といった人物を輩出する。そして杜恕には杜篤論なる文がある。

③⑦ 論語憲問篇。

③⑧ 前漢書卷五三 中山靖王勝傳。

③⑨ 貴戚と學者・文人との結びつきは馬氏の場合については本文

中に述べたが、その他のケースを左に列挙しておく。

陰興——馮衍

東海王劉蒼——李育

竇融——班彪

竇憲——班固・傅毅・崔駰

梁太后——班昭

reign, with Lo-yang emerging as a center of flourishing literary activities under such men as Ou-yang Hsiu 歐陽脩, the number of literati settling grew even further. Out of this phenomenon came the notion that Lo-yang was the *Nest of Literati* 士大夫之淵藪, which provided the inhabitants the justification necessary for following a route quite distinct from that of K'ai-feng.

On the political side, the rivalry often took the form of pressure from K'ai-feng and resistance from Lo-yang. With the rise of Wang An-shih 王安石, the tension between the two rose to a peak. The literati of Lo-yang, notably those associated with the *Lo-yang ch'i-ying hui* 洛陽耆英會 e. g., Fu Pi 富弼, Wen Yen-po 文彥博, and Ou-yang Hsiu were among the most vociferous of Wang's critics. While the bureaucrats in K'ai-feng who executed Wang's policies were mostly from the south, where a spectacular economic growth had been taking place, these men were by and large northerners. And their ignorance of and distaste for economic matters, which they termed *li-ts'ai* 理財, are evident in their writings, usually full of hatred of K'ai-feng bureaucrats. The Lo-yang literati's contempt for *li-ts'ai* accounts for, more than anything else, their failure in coping with the problems of the time when they came to power under Che-tzung 哲宗.

Behind the rivalry between K'ai-feng and Lo-yang under the Northern Sung lies, as it has been explained, the difference in opinion concerning *li-ts'ai* between their élites. To examine how this problem of *li-tsai* was understood by the literati throughout the Sung dynasty shall be a task from now.

On the Career of Ti-wu Lun 第五倫

Kano Naosada

In the latter half of the Western Han the families of imperial consorts emerged as a powerful political bloc, often endangering the survival of the dynasty. Wang Mang 王莽 who eventually usurped the throne belong to one of those families.

The Eastern Han also suffered from empress' families throughout its 200 years history. Moreover, the growing influence of eunuchs added

further complication. Even the relatively stable reigns of Emperors Chang 章帝 and Ming 明帝 were not exceptions.

The first half of this paper looks into the career of Ti-wu Lun, who as a *chief minister* 三公 under Emperor Chang memorialized three times against empress' families. Ti-wu Lun spent the turbulent years following the downfall of the Western Han in the countryside protecting local people. After mercantile activities he entered local bureaucracy, rising to become a prefect. Soon known for the ability, he was given an exceptional promotion and appointed a *chief minister* when Emperor Chang ascended the throne.

In the second half the memorials of Ti-wu Lun are examined together with the state of empress' families that time, taking the Ma 馬 family as example.

The empress' families increased their influence principally by having the members to serve certain posts at the court, such as *palace guards* 衛尉. In addition, they assembled scholars and literati around them.